秋田県文化財調査報告書第36集

成沢遺跡発掘調査報告書

秋胃県埋蔵文化財センタ

1976 . 3

秋田県教育委員会

「成沢遺跡」は大曲盆地の西部に位置する繩文時代晩期から古代にわたる遺跡である。

昭和46年度から実施している「秋田県営大川西根地区圃場整備事業」の実施区域に所在している「成沢遺跡」の緊急調査が、昭和49年に大曲市教育委員会の手によって実施された。この際、周辺の遺跡範囲確認の調査も併せて行われ、その結果、窯跡らしい遺構のあることが知られた。

その遺構を解明するため、昭和50年度に秋田県教育委員会が調査主体者となって発掘 調査を実施したのである。この度の調査で、登窯3基が発見されたことは、近くに国指 定史跡「払田柵跡」の所在することとあわせて、今後の大曲盆地周辺の遺跡解明に大き な資料を提供するものと推察される。

本報告書が研究者をはじめ、遺跡に関心を持っておられる方々に広く活用されること を期待すると共に、調査にご協力いただいた調査具各位、ならびに大曲市教育委員会に 対し、深甚の謝意を表したい。

昭和51年3月

秋田県教育委員会

教育長 畠 山 芳 郎

17.																				
1	道	上跡	の位	置	と現	状.		 			 	 	 				 	 		. 1
2	発		掘	調	查			 		••••	 ••••	 	 			•••••	 	 	••••	. 3
(1)	調	査	0)	目	的.		 		•••••	 	 	 	,			 	 	• • • •	. 3
((2)	調	查	0)	組	織・		 			 	 	 				 	 		4
((3)	7	1) .9	Fo	の設	定•		 			 	 	 				 	 		. 4
(4)	調	查		Н	誌		 		••••	 	 	 				 	 		6
3	誰	1	査	結	果			 		•••••	 ••••	 	 			•••••	 	 		6
((1)	出	±	. i	豊	構…		 		•••••	 ••••	 	 				 	 		6
	(1)	1	号	登	. 3	ķ	 			 	 	 				 	 		. 6
	(1))	2	号	登	. #	ä	 			 	 	 				 	 		. 7
	6	+	3	号	登	37	ķ	 		••••	 	 	 				 	 	••••	. 7
	(=)	そ		カ		也													
1	(2)	出	±	. j	贵	物-		 			 	 	 				 	 	••••	. 8
	4)	須)	恵	景	분	 		••••	 	 	 				 	 	•••	. 8
		(A)	杯					 			 	 	 				 	 		. 8
			а	3	頃…			 			 	 	 				 	 	••••	. 8
			b	3	順…			 			 	 	 				 	 		. 8
			С	30	煩…			 			 	 	 				 	 	•••	. 8
		(B)	髙	台台	付杯	····		 			 	 	 				 	 	•••	. 0
			a	3	順…			 			 	 	 				 	 	•••	. 0
			b	3	頃…			 			 	 	 				 	 	•••	. 0
		(C)	孟	į .				 			 	 	 				 	 		. 0
		(D)	돷	ξ.				 	*****		 	 	 				 	 		. 0
	(12)	土	ĺ	師	11	문	 			 	 	 				 	 	•••	-10
		(A)	杯					 			 	 	 				 	 	•••	1
		(B)	酷	台台	付皿			 			 	 	 				 	 	•••	1
		(C)	퐟	ξ.		••••		 		••••	 	 	 		••••	•••••	 	 	•••	1
	6)	維	文 .	式 :	土岩	뿝	 	•••••		 	 	 				 	 	•••	1
	(=)	石			- 1	是													
	(1)	石	1	製		ā													
4	*	F			察			 			 	 	 *****		••••		 	 	•••	.1

図・写真目次

第1図					••••••						
第2図											
第3図											
第4図											
第5図					•••••						
第6図	4	D • 4	4 E	· 3 E	大グリ・	,	 	 •••••	•••••	 	 18
第7図	2	号登新	K · H	出土器	學実測図…		 	 	•••••	 	 19
第8図	出	土器	実測	図…			 	 •••••	•••••	 	 20
第9図	石	器头	区 測	図…	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		 	 		 	 21
写真1	1	西作	明から	5 の道	₫景		 	 •••••	•••••	 	 22
	2	調	査	地	点		 	 		 	 22
写真2	1	4 E	と大ク	グリッ	ド中心の	配石…	 	 		 	 23
	2	配	石	遺	構		 	 		 	 23
写真3	1	配	石	遺	構		 	 		 	 24
	2	配	石	遺	構		 	 		 	 24
写真4	1	石剣	川の出	北土出	態		 	 		 	 25
	2	独針	ち石の	上出く	.状態		 	 		 	 25
写真5	1	登	窯	全	景		 	 		 	 26
	2	1	号	登	窯	********	 	 		 	 26
写真6	1	1号	·登案	8杯出	土状態…	•	 	 		 	 27
	2	1	号	<u>y</u> ,	窯	•	 	 		 	 27
写真7	1	2	号	登	窯		 	 		 	 28
	2				状態						
写真8	1	3	号	登	窯		 	 		 	 29
	2	3 4	子登	窯石	組		 *****	 		 	 29
写真9	1	3号	登窯	出出	状態		 	 		 	 30
	2	3	号	登	窯		 	 		 	 30
写真10	1 5	子登 窯	焼成	部出	土遺物…		 	 		 	 31
写真11	出	\pm	遺	物…			 	 		 	 32
写真12	出	土	遺	物…	•••••		 	 		 	 33
写真13	出	±.	遺	物…	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		 	 		 	 34
写真14	出	土	遺	物…	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		 	 		 	 35
写真15	出	土	遺	物…			 	 		 	 36
瓦百16	44	+	:#:	4bn			 	 		 	 27



0124

例 言

- 1 本報告書は杉渕が中心となって作成した。
- 2 測量図面のうち、登窯関係のものは、鍋倉調査員の作成したものを使用した。第4図と第5図 の平面図は第3図の原図から作成したものである。
- 3 写真は杉渕撮影のものを使用した。
- 4 遺物については、今後機会をみて、詳細に検討を加えてみたい。

1 遺跡の位置と現状

成沢遺跡は、大曲市大曲西根字成沢に所在する。横手盆地の西端と笹森丘陵の東端とが接する地点、国鉄奥羽本線大曲駅の南西約 3.3kmの地点にあたっている。大曲駅の西方には、標高 387.5m の太平山(姫神山)が際立って高く見えるが、本遺跡は、この山から南東に伸びてくる台地の東端部に位置している。遺跡の西側には大きな沢が、北側には小さな沢が発達していて、台地東端部は切り離されているかのような感じを受ける。今回調査した成沢遺跡は、この台地の西端部に営まれている。標高は47m前後で、遺跡の東側約 1.7kmのところを雄物川が北流し、北東約 2.4kmの地点で西流してくる丸子川と合流している。

遺跡のある台地は、現在、畑地と杉林として利用されているが、もともとは林であったものを開墾した場所である。昭和26年頃から開墾に着手したとの事であるが、その時には多数の遺物が出土したらしく、現在も畑地となっている部分には多数の遺物が散乱しており、墨書のある回転へラ切りの須恵器杯も採集されている。台地の上部では包含層が薄いため、耕作による攪乱を強く受けているが、斜面になっている部分ではそれほどでもない。

本遺跡のある台地の西側の沢は、昭和48年に圃場整備がなされており、その際に多量の縄文時代後期及び晩期の遺物が出土した。翌昭和49年には大曲市教育委員会によって発掘調査が行われ、縄文時代後期の住居跡二軒、土壙二基が検出されている(註1)。従って、成沢遺跡は、台地の西端部から沢部にかけての広い範囲を占めており、その時期も各時代に広くわたっている。今回調査した地点は、その内の一部分であり、遺物も昭和49年度調査とは異なっている。沢部と台地部とは分けて、別々の遺跡としたほうが良いかも知れない。

本遺跡の南方約 0.5kmには弥生式時代の遺物を出土する字津台遺跡(註2),同じく南方約 4.2km には九十九沢窯跡(註3)が所在しており、横手盆地西端縁辺の丘陵部には多くの遺跡が発見され ている。又、本遺跡の東北東約 8.8kmのところには国の指定史跡である払田栅跡(註4)(註5),南 東約 7.5kmには墨書のある須恵器を大量に出土した藤木遺跡等が盆地の沖積地に存在している(註6)。

- 註1 昭和49年度「成沢遺跡発掘調査略報」 大曲市教育委員会
- 註2 須藤 隆 「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」 文化33-3 1970
- 註3 武藤鉄城 「秋田県仙北郡九十九沢窯跡」 日本考古学年報2 1949
- 註4 上田三平 「指定史蹟拂田栅阯」 仙北村史蹟保存会 1968再版
- 註 5 払田柵跡調查事務所年報1974 「払田栅跡」秋田県教育委員会払田柵跡調査事務所 1975
- 註6 奈良修介, 豊島 昻 「秋田県の考古学」 吉川弘文館 1967

2

秋田県遺跡地名表(1963年)による大曲周辺地区遺跡分布一覧表

遺跡番号	遺 跡	名	所在	遺物
5	払 田 棚	跡	仙北郡仙北町, 千畑村	栅木, 須恵, 土師, 平瓦
186	四十二館	跡	大曲市藤木	須恵, 土師
187	九十九沢窯	跡	大曲市内小友字下田谷地103	須恵
188	中	沢	大曲市内小友字中沢165	石鏃,磨製石斧
190	宇津	台	大曲市大曲西根字下仁応寺	弥生式土器片
191	下 成	沢	大曲市大曲西根字下成沢97~100	縄文(中~晚)土器,石器
192	成	沢	大曲市大曲西根字成沢	須恵器片
193	土 屋	館	大曲市大曲字土屋館38	大型石棒
194	館の	下	大曲市大曲字古町56	土偶
196	大 曲	城	大曲市大曲字土屋城	
197	上	野	大曲市高関上郷字上野80~90	土師壺, 大刀
598	油公	闒	仙北郡神岡町神宮寺字八石上高野37	土器, 石斧
599	東高	野	仙北郡神岡町神宮寺字高野51	須恵器片
600	笹	倉	仙北郡神岡町神宮寺字笹倉10	繩文中期土器片
601	笹	倉	仙北郡神岡町神宮寺字笹倉10	
626	石 名	館	仙北郡六郷町六郷字石名館59~61	繩文晚期(土製品,石製品 土器片,木製品,石器)
627	安 楽	寺	仙北郡六郷町六郷字安楽寺224~267	石鏃, 石小刀, 石匙
628	古 館 経	塚	仙北郡六郷町六郷字古館	松枝文鐘
634	七ツ窯	跡	仙北郡中仙町清水字中野口	須恵器
635	極楽野	С	仙北郡中仙町長野字極楽野273	縄文中期土器,石器
636	極楽野	M	仙北郡中仙町長野字極楽野85	土器片, 石小刀, 石鏃
637	極楽野	Н	仙北郡中仙町長野字極楽野273	石小刀, 石斧, 石鏃
644	新	処	仙北郡中仙町清水字新処	石小刀
645	高	野	仙北郡中仙町清水字下黒土高野	須恵器
849	藤	木	大曲市藤木二本柳字谷地	

2 発 掘 調 査

(1) 調査の目的

成沢遺跡は、昭和46年度から実施されている「秋田県営大川西根地区圃場整備事業」区域内に所在しており、昭和49年の発掘調査(註1)においても重要な遺跡である事が確認されている。又、 遺跡の範囲も広く、遺物も各時代にわたって出土しているので、本遺跡の性格解明と記録保存のた めに発掘調査を行う事となった。

(2) 調査の組織

調查主体 …… 秋田県教育委員会

調 查 員……鍋倉勝夫 (秋田県文化財専門委員, 敬愛学園高等学校教諭)

杉渕 馨 (日本考古学協会員, 県立大曲高等学校教諭)

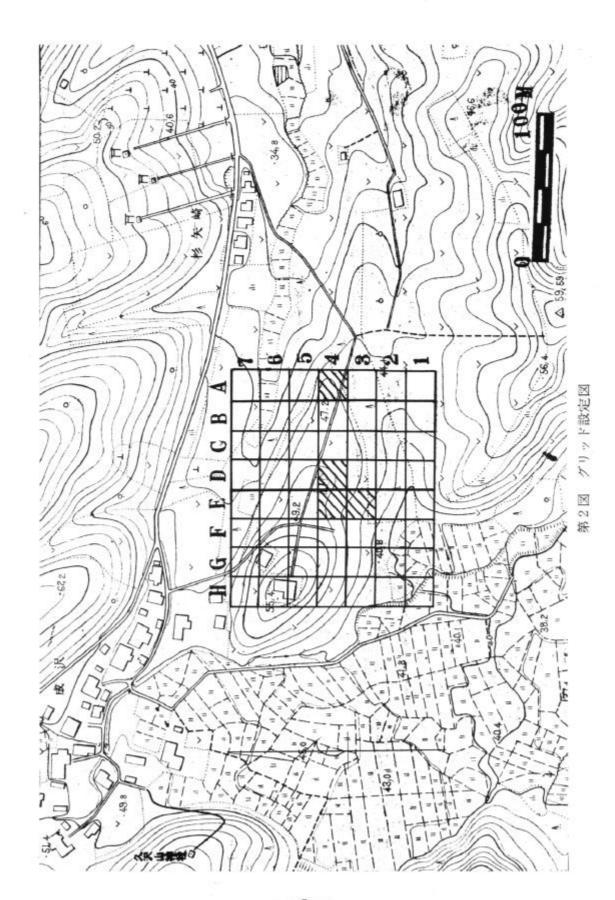
調査補助員……藤原妃敏(東北大学三年),高橋正人(芝浦工業大学一年),照井義宣(北海道大学一年),藤沢 昌(秋田大学一年),大曲高等学校地理調査部員(OB……戸沢靖康,三年……小林みどり,二年……大釜裕子,大野千昭,加藤昭彦,熊谷恭子,後藤頼子,小林貞子,佐々木ますみ,高橋忠太郎,高橋寛臣,細井一春,森元真知子,山田恵一,一年……伊藤典子,斎藤亮子,佐藤寿志子,菅原真紀子,鈴木ひろ子,高橋厚子,根本真理子,野村朋昭,平瀬英子,丸山光子,渡辺智子) 調査協力者……大曲高等学校生徒(藤井勉,最上正美,伊藤晴康,井上恵智子,高橋洋子,栗林麻貴子,須田敦子),深谷佳良子

調査事務担当……秋田県教育庁文化課 主任学芸主事 門間光夫 秋田県教育庁文化課 庶務主任 佐々木大晃 大曲市生涯教育推進センター 所長補佐 高田俊勝 同 主 事 高野昭次

(3) グリッドの設定 (第2図)

予定した調査地点は、連続していないためと、台地全体の性格把握という点からグリッド法を採用する事にした。台地の中央にあるサイロの北西角を基点とし、これを通る南北線と東西線を決め 20m×20mの大グリッドを設定、畑地の東端部をA列として順次西へH列まで、台地の南側の沢に接する場所を1列として順次南へ7列まで設定した。更に、大グリッドを 100個の小グリッド(2m×2m) に区画し、東から西へ小文字のアルファベットa~jを、南から北へ数字1~10を符している。グリッドの呼称は、4A4bのように数字アルファベット、大グリッド小グリッドの順に使用する事にした。

調査地点は、4A大グリッド、4D大グリッド、4E大グリッド、3E大グリッドである。実際 に発掘調査を行ったのは、58小グリッド、約220mである。石器類を多数表面採集する事のできる 台地西南端部の斜面も調査したかったのであるが、日数の関係から手をつける事ができなかった。



- 5 -

(4) 調 査 日 誌

8月5日(火) 晴時々曇

午前九時、大川西根公民館に集合。十時グリッドの設定開始。午後から発掘調査を開始する。地 点は4A大グリッド、斜面になっている地点から1号登窯が出土した。深田氏、榊田氏、大川生涯 教育推進センター所長来跡。

8月6日(水) 雨一時曇。夜豪雨

午前中は雨のため調査中止。午後からテントの設営と4E大グリッドの設定。

8月7日(木) 晴のち曇。一時にわか雨

鍋倉調査員本日より参加。昨夜の雨のため、新しい小グリッドを調査。4A大グリッドの東方杉 林側に2号登窯出土。杉林の地主である能味氏来跡。杉の若木のうち一部を移植してよいとの事。 本日より4E大グリッドにも調査を拡張し、4A大グリッドは鍋倉調査員、4E大グリッドは杉渕 調査員の担当とする事にした。

8月8日(金) 曇一時にわか雨

2号登窯の調査開始。4E大グリッドには配石遺構らしいものが出土して3E大グリッドに拡張 する事にした。地主の承諾を得たとの連絡あり。大曲市助役、大曲市文化財保護委員一同来跡。

8月9日(土) 晴一時曇

3号登窯を1号登窯の西側に検出し、調査に入る。3E大グリッドに調査拡張。林大曲高校教諭、 船木・畠山・児玉氏ら払田棚調査事務所員来跡。

8月10日(日) 晴

調査は図面作成の段階に入ったが、現場に到着して3号登窯の杯が盗難にあっているのを発見。 3E大グリッドには土師の住居跡の壁らしいものを検出したが、地主が現場へ来て条件が違うとの 事で調査を中断、全員で拡張部を埋め戻す。深田氏来跡。夕刻、鍋倉調査員ジンマシンのため帰宅。

8月11日(月) 晴

朝, 鍋倉調査員戻る。実測を完了して, 3 時公民館で解散。遺物等は生涯教育推進センターへ運搬。 註1 昭和49年度「成沢遺跡発掘調査略報」 大曲市教育委員会 A 8

3 調 査 結 果

(1) 出 土 遺 構

(イ) 1号登窯(第3図,第4図)

4 A大グリッドに検出された半地下式の登窯である。中軸線は南西方向にむく。全長約5.1m,最

大巾約 1.2m である。窯体は、地山を掘り込んで粘土を貼り、その上にスサ入粘土を貼って構築している。燃焼部は、地山に基盤をおいておらず、暗褐色の柔らかい土層の中に築かれている。そのため、 $40\times20\times10$ cm程の平たい石を組合せて側壁とし、補強につとめている(写真 5-2)。燃焼部の床面は何度も補修されたらしく、焼成部との間に段がついている。床面は、 $20^\circ \sim 28^\circ$ の傾斜をもっていて、窯尻部付近では更に傾斜が強まる。灰原は、沢への斜面を利用して作り出しているが、杉林がせまっていて部分的にしか調査できなかった。

遺物は、 \sim ラ切りの須恵器杯(図 $7-1\sim3$ 、写真 $10-1\sim5$)、須恵器甕(写真 $7-6\sim18$)、糸切りで内黒の土師器高台付皿(写真10-19、20)が出土している。

(ロ) 2号登窯(第3図)

4 A大グリッドに検出された半地下式の登窯で、1号登窯の東側 2.8mのところに存在している。 杉林が東側に隣接しているため、窯体の西側半分しか調査できなかった。床面は約22°の勾配をもち、 窯尻部付近では急に傾斜が強くなっている。燃焼部は、1号登窯と同様に暗褐色土層にスサ入り粘 土を貼って築いており、側壁には平たい石を使用していたと考えられるが、石の大部分は原位置に なく、灰原や窯体内部に落ちていた。窯体の中軸線は南西方向をむく。全長約6.7m、巾は約 1.1m 程と推定される。

遺物は、ヘラ切りの須恵器杯(図 $7-4\sim8$ 、写真 $11-6\sim8$ 、写真 $13-18\sim20$)、須恵器甕(写真 $11-1\sim5$)、糸切りで内黒の土師器高台付皿(写真11-9、図8-3)、灰原からは須恵器高台付杯(図9-1)が出土している。

(ハ) 3号登窯(第3図,第5図)

4 A大グリッド、1 号登窯の西 3.8mのところに検出された半地下式の登窯である。中軸線は南西にむく。窯体の全長は約5.4m,最大巾約1.2mである。1 号登窯と同様に、燃焼部は暗褐色の柔らかい土層の中にあり、平たい石を組合わせて側壁を補強している。三基の登窯のうちでは最も床面の傾斜が強く、約 35°となっている。灰原は、一部分しか調査できなかった。

遺物は、ヘラ切りの領恵器杯(図8-6~8、写真12-6~11、写真13-26~28)、ヘラ切りによって切り離したあとに削りを加えて宝珠状のつまみを付けた領恵器の蓋(写真12-4、5、図8-4、5)、ヘラ切りのあと高台を貼りつけた領恵器の高台付杯(図8-11、12、写真13-24、25)、領恵器饕(写真13-13~19)が出土している。

(二) その他

4 D大グリッドの南西部に住居跡の東側の壁らしいものが検出されている。壁に接して焼土が固まっている部分があり、中からは口縁部の外反した長胴の土師器甕の破片が出土している。カマドとも思われるが、煙道もはっきりしておらず、又、耕作による攪乱を強く受けている。発掘予定地域外だったので、一部調査の末、直ちに埋戻しを行ったため柱穴等の確認は十分でなかった。土師器を使用した住居跡になるのかどうか断定はできない。

4 E大グリッドと4 D大グリッドの西端部とにかけて多量の河原石が検出されている。大きな石で50×30×20cm程、小さい石で握った攀程である。調査地点の一部には礫質の土層はあるが、そこに含まれているのはピンポン玉よりちょっと小さめの礫しか入っていないので、これらの石の配置は人為的なものであると考える。しかし、耕作による攪乱が激しくて大部分の石は原位置になく、又、相当量の石が抜きとられて路傍に積みあげられているので、元来の配石の状態は良くわからない。周囲を一条の刻線で刻んだ石や(写真3-2)、石剣、独鈷石の出土から考えて、祭祀的な性格をもった配石であろう。ピットは浅くてロームに殆んど達しておらず、しかも小さいものしか検出できなかった。中からの遺物の出土はなく、配石遺構と同時代のものであるかどうか認めがたい。

(2) 出 土 遺 物

(イ) 須 恵 器(註1)

(A) 杯

出土した須恵器の杯は、ロクロからの切り離し技法の違いによって三類に大別できる。胎土には 混和材として砂を混ぜているが、その量はまちまちである。総じて砂の分量は多いようであり、石 英や長石等の粒子も荒い。そのため、水挽き成形技法によって丁寧に引き出しをおこなっているが、 杯のはだに砂が出てザラザラしたものが少なくない。又、布か刷毛状の工具で横撫でをおこなって いる。色調は、赤っぱいものもあって、十分に還元炤で焼かれていないものもある。なお、口縁部 に口辺部と平行な色調の異なる部分があって(写真13—17)、重ね焼きを行なっていた事がわかる。

a類(図8-8, 14)

ロクロからへラ状の工具で切り離しているが、底部と体部との間に明確な境界を認めがたい杯が 本類である。丸底気味の底部となっていて、床付面からの立ち上りもゆるやかになっている。図 8 - 8 は、3 号登窯の焼成部から出土していて、褐色気味の色調をもった、胎土・焼成共に良好な杯 である。図 8 - 14 は、3 号登窯の灰原から出土した杯で、胎土・焼成共に良好である。へラ切りの あとに、ロクロに伏せて削り調整を加えているようにも見えるがはっきりしない。「-」の窯印がつ いている。

11 5

本類に属する杯は、3号登窯からだけ出土していて、他の登窯からは出土していない。

b類(図7-4, 5, 図8-13)

ヘラ切りによってロクロから切り離し、底部と体部との間に明確な境界が認められる杯が本類である。床付面からの立ち上りは強い。図7−4、5は2号登窯から出土した揚底の杯で、自然釉がかかっている。図8−13は表面採集したものである。白黄褐色の色調をもち、胎土・焼成共にあまり良くない。

本類の杯は、1号登窯と2号登窯から出土しており、3号登窯からの出土はみられなかった。 **c類**(図7-1, 6, 図8-6, 7) へラ切りによってロクロから切り離されているが、当初予定した切り離し面より下を切り離した 杯が本類である。ロクロで体部を引きだして、外形を調整した後に切り離す底部周辺に指で当たり を行なう(註 2)。普通はその当たりの部分を切り離すのであるが、本類の場合は、当たりの部分よ り下を切り離しているのである。本類の当たりの部分は巾が狭いので、指ではなく、ヘラ状の工具 を使用していると思われる。当たりの部分と切り離し面との間は丸味を帯びている。図7-1は、 外反気味の口縁をもち、自然釉が一部にかかっている。多量の砂粒を含み、焼きは固い。図7-6 は、揚底の杯で焼成も良好である。当たりの部分と切り離し面は一部で一緒になっている。図8-6、7は、焼きのあまり良くない白っぽい色調の杯である。

本類の杯は、1号登窯~3号登窯のすべてから出土している。

(B) 高台付杯

高台付杯は、ヘラ切りによって体部をロクロから切り離した後に、高台を貼り付けている。削り 調整の有無によって二類に分類する事ができる。

a類(図8-11, 12)

体部をヘラ切りによってロクロから切り離した後に、ロクロの上に伏せてヘラ状工具で回転削り 調整を行なってから高台を貼り付けたものが本類である。図8-11、12は、3号焼成部から出土し ている。布か刷毛状の工具で横撫でを行なった後、体部をロクロからヘラ状工具で切り離し、ロク ロに伏せて回転させながら削り調整を加えて高台を貼り付けている。削りの部分は荒い。外底面外 側の貼り付け部分は、布か刷毛状の工具で撫でを行っており、その時にもロクロは回転させている。

b類(図8-1)

体部をヘラ切りによってロクロから切り離した後に高台を貼り付け、削り調整は行わないものが 本類である。図8-1は、2号登窯の焼成部から出土している。体部をロクロからヘラ切りで切り 離した後に高台を貼り付け、ロクロを回転させながら外底面外側の貼り付け部分を布か刷毛状の工 具で撫でている。

(C) 蓋(図8-4, 5, 写真13-15)

完形品は出土していないが、三個体分出土している。図8-5は、宝珠状のツマミが付けられている。図8-4は、体外面に一条の細い沈線が付されており、多量の砂粒を含んでいる。写真13-15は、体内面口辺部付近に反りのある焼成良好の蓋である。重ね焼きの跡もみられる。三個の蓋は、共に、体内面と体外面には布か刷毛状の工具で横撫でを加えており、天井外面にはヘラ状工具の跡が口辺部と平行に残っている。ロクロからヘラ切りによって切り離した後に、ロクロに伏せて回転へラ削りを行ったようにも見えるが、明確ではない。

(D) 甕

出土した甕は破片のみで、復元できる遺物はない。形態としては、頸部の短かい写真14-1のような甕類と、写真14-2、3、4、6のように比較的頸の長い甕類とに分ける事ができる。頸の短

かい類には、写真11—3、11のように口縁部がやや外反して肩部に張りのないものと、写真10—6 のように頸部がほぼ直立して肩部が強く張るものとがある。頸の長い類は、頸部が直立して肩部が張っているようである(写真14—3)。甕の大部分は、写真10—8 のように巻上げ法によって製作し、アテ板と叩き板によって打圧して胎土をしめている。写真10—14や写真11—5 のように、肩部より上方に横位の櫛目を入れて叩き目を消しているものもある。写真13—13のように木葉痕をもった底部も出土している。

(口) 土 師 器

(A) 杯(写真14-14, 15, 17, 19, 23~25)

口縁部が外反する19のような杯と17のようにほぼ直線的に口辺部に体部が続く杯とがある。ロクロからの切り離しは、15、23~25のように糸切りである。削り調整はない。24は、二度に分けて切っているようである。大部分の杯は、内外共にヘラミガキを行い、内部に黒色処理を加えている(15、17、19、23)。

(B) 高台付皿 (写真14, 21, 22, 図8-3, 図7-3)

体部をロクロから糸切りによって切り離した後に、高台を貼り付けて、貼り付け部分の外底面の 外側を撫でている。内側にはヘラミガキを加え、黒色処理を施している。糸切り痕は荒い。須恵器 の胎土とは異なって混和材の量も少なく、粒子も細かいものを使用している。8-3は、高台を貼 り付けた後にヘラ状工具で強く押えたため、太い沈線となっている。

(C) 臺 (写真14-16, 18, 20, 写真13-21, 写真11-10)

要は、口縁部が外反した長胴の甕と思われるが、完形品は出土しなかった。16、18はロクロを使用しながら、口縁部付近を横撫でしている。写真13-21は、糸切りによってロクロから切り離しているが、内外共に横位の櫛目(板目?)が残っている。上部には、胴部が離れた痕跡があるので、胴部を巻上げて作るか、底部と胴部を別々に作ったのかもしれないい。

(ハ) 縄文式土器 (写真14-26~43, 写真15)

出土した縄文式土器は、包含層が攪乱されていて、層位的には把握する事ができなかった。破片 が細かくはっきりしないが、混和材は砂粒だけで、繊維を含むものはなかった。

写真14—26~29のように口縁部文様帯が沈線を主体としているもの、写真14—30~34のように太 目の半截竹管を利用して施文したもの、写真14—35~41のように細い半截竹管や同方向への沈線に よって施文されたもの、写真14—42、43のように施文具に撚糸を網目状に巻きつけて施文したもの 写真15—1、2のように2本1組の撚糸を使用したもの、写真15—3のようにゆるやかな波状口縁 と刺突をもった細い横位の貼付粘土紐をもつもの、写真15—4、5のように口縁部に渦巻状の文様 があって胴部には沈線があるもの、写真15—6~11のように口縁部に太い無文の隆帯をもつもの、 写真15—12、13のように複合口縁をもつもの、写真21~24のように平縁で斜行縄文だけをもつもの が出土している。

(二) 石 器(第9図, 写真16)(註3)

図9-1は、中粒砂岩製の石錘である。河原石を利用して四カ所に打撃を加えて打欠いている。 剝離は両面に入っている。

図9-4,5は、硬質頁岩製の縦形石匙である。表側には細かな剝離が全面に入っている。4の 裏側は先端部とつまみの部分に押圧剝離が入り、残りは第一次剝離面である。5の裏側は、つまみ の分にだけ押圧剝離を加えている。

図9-6~9は硬質頁岩製の石槍である。

図9-10と11は硬質頁岩製の石器である。「く」の字形に押圧剝離が入っていて、一部には自然面 を残している。削器としての用途をもったものであろう。

図9-12は硬質頁岩製の打製石斧である。先端部に細かい剝離が集中している。

図9-13は、表面採集である。硬質頁岩製で、石鏃か石槍のような用途をもつものであろう。

図9-14~16, 写真16-16, 18, 19, 21, 23はくぼみ石である。図9-16は安山岩であるが残り は凝灰質泥岩である。くぼみは、両面につけられている。

(木) 石 製 品(図9-2, 3)

図9-2は粘板岩製の石剣である。先端部は欠けているが、その部分を再度両面から磨いて再使 用している。

図9-3は凝灰岩製の独鈷石である。石質は非常にもろく、風化が激しい。裏面にも一部高まっている部分が残っている。

- 註1 部位の名称については、「富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ じょうべのま遺跡」1974の第3 章遺物の部位及び名称によった。
- 註2 阿部義平 「ロクロ技術の復元」 考古学研究第18巻第2号 1971
- 註3 石質については、県立大曲高等学校、高橋直文教諭に御教示をうけた。

4 考 察

検出された縄文式土器は、縄文前期から縄文中期にかけてのものである。胎土に繊維がはいっていない厚手の破片で、磨消縄文の施文が無い事を見れば、縄文前期末葉から縄文中期初頭に中心をおいた時期に、本遺跡のある台地が利用されていたと考えられるのである。台地の西側の沢にあっては、縄文後期の時代に集落が営まれていたと考えられるのであるが(註1)、その前段階としての営みが本遺跡であったと思われる。台地から微高地へ、土地の利用も時が経つにつれて変化していったようである。直接、沢部との関連を裏付ける資料は検出されなかったが、成沢全体としては、縄文前期からほぼ連続して生活の場として利用されたと思われる。

配石の遺構は、遺物包含層に存在しているので、繩文前期から繩文中期の時代の中で構築されたものと考えられる。県内におけるこうした配石遺構については、雄勝郡稲川町宝竜台遺跡(註2)、

仙北郡西木村補野遺跡(註3),横手市中杉沢遺跡(註4),鹿角市黒森山遺跡(註5)で報告されている。これらの遺構は、縄文中期に形成されたと考えられているものであり、本遺跡もまたほぼ同じような時期に形成されたものであろう。ピットを伴わず、しかも石の組み方が割合に粗雑であって本遺跡に近いのは、宝竜台遺跡二号組石である。縄文中期におけるこうした配石遺構が、縄文後期の環状列石へとつながっていくのであろう。

本遺跡出土の三基の登窯は、共に半地下式であり、基本的には無階無段の構築手法をとったと思われる。又、共に燃焼部側壁に平たい石を使用しているが、遺跡付近の地山が急斜面をもっていたため、他の遺跡のように温度が高くなる燃焼部をがっしりした地山に掘り込む事ができなかったためであろう。同じ地域に存在する九十九沢窯跡(註6)、ヘラ切りの杯を出土している横手市郷土館遺跡(註7)、秋田市手形山窯跡(註8)、南秋田郡若美町海老沢窯跡(註9)の各登窯では、燃焼部側壁に石を使用した構築手法をとっておらず、すべてスサ入り粘土を貼り付けただけの側壁になっている。従って、成沢遺跡のような登窯の構築法は、地方色をもった構築法とか年代差による構築法という事はできず、原料と燃料を確保できる条件が整っている地点では地形にあわせて登窯を構築したものと考えられる。本遺跡のように平たい石を燃焼部に使用している構築法をとった県内での例は、横手市物見窯跡(註10)で見られる。物見窯跡は、床面に勾配のつかない平窯の様式をとっており、遺物は糸切りの須恵器杯を中心に出土している。本遺跡の登窯とは形態、時代共に異なっているが、柔らかい土層に床面をもっているため燃焼部を補強したのであろう。燃焼部側壁に石を使用して補強している登窯は、本遺跡が県内での最初の検出例である。

本遺跡から出土した須恵器の杯は、三類に分類する事ができ、すべてへラ切りによってロクロから切り離されている。三基の登窯の出土杯を見てみると、1号登窯と2号登窯にあってはb類とて類とが、3号登窯にあってはa類とc類とが伴出している。a類とc類との共伴関係はみられない。又、切り離しの技術から考えてみれば、a類とb類、b類とc類は同時に製作されたものとは思われず、年代の違いによって三種類の杯が製作されたと考えられる。その年代順は、a類→c類→b類か、もしくはb類→c類→a類である。切り離し技法の省略化という観点からは、a類→c類→b類の編年が成立する。多質城周辺では、須恵器杯の編年が積極的に試みられており(註11)、本遺跡のa類は多質域の6−a類、b類は同6−b類に相当する(註12)。多質域では6−a類→6−b類の編年がなされており(註13)、本遺跡においてもa類がb類に先行するのであろう。従って、登窯における共伴関係、切り離し技法の簡素化、多質域の編年から、本遺跡の須恵器杯は、a類→c

須恵器の高台付杯は二種類検出されていて、すべてヘラ切りによってロクロから切り離されている。須恵器生産にあっては、削り調整技法が消滅していく方向にあるので(註14)、本遺跡にあっても a 類→ b 類の変遷が考えられるのである。

成沢遺跡出土の三基の登窯は、出土する遺物から考えると、三基同時に操業を開始したものでは

なく、3号登窯→1号登窯・2号登窯の順に構築されたものと考えられる。3号登窯は、須恵器杯 a 類の時期に操業を開始して、高台付杯、蓋、甕類を製作している。回転へラ切りによって小型の 須恵器が製作されたが、一部には、削り調整技法が採用されていたのである。そして、須恵器杯 c 類の時期にその操業を停止したようである。1号登窯と2号登窯は、須恵器杯 c 類の時期に使用を 開始して、須恵器杯 b 類の時期にその使用を終了したものであろう。1号登窯と2号登窯が使用されていた時代には、削り調整技法はもはや採用されなくなり、一度の回転へラ切りによってロクロ から小形の須恵器が切り離されていったのである。1号登窯と2号登窯にあっては、内黒で糸切り 痕のある土師器の高台付皿が発見されているので、最終的な段階では、回転糸切りによる切り離し 技法が普及し始めていたのであろう。

成沢遺跡の東北東約 8.8kmところにある払田栅跡では、嘉祥2年(849年)正月の墨書がある第4 号木簡とともに回転糸切りによってロクロから切り離した須恵器杯が伴出している (註15)。従って、 9世紀の中頃には成沢遺跡の周辺で回転糸切りによる切り離し技法が採用されていたと考える事が できよう。こうした周囲の状況から、成沢遺跡の登窯は、9世紀中頃以前に操業されたと思われる。 成沢遺跡の登窯では三類の杯が出土しているので、8世紀の末頃から9世紀の中頃までに、1号登 窯~3号登窯の年代を推定する事ができよう。

成沢遺跡の登窯で製作された製品の搬出先としては、より近い遺跡として払田棚跡が考えられる。 収蔵庫に保管されているヘラ切り須恵器杯を計測してみると、底径÷口径の値(A値)は、0.44~ 0.63、平均で0.55であり、2×高さ÷(口径-底径)の値(B値)は、0.86~1.37、平均で 1.165で ある。成沢遺跡の登窯出土須恵器杯のA値は0.52~0.57、平均で0.53、B値は1.03~1.24、平均で 1.13となっている。詳しくは、杯の胎土、焼成、混和材等を比較しなければならないが、払田棚出 土杯の計測値の範囲内に成沢遺跡のそれがおさまるのであり、払田棚に搬出された可能性は高い。 ただ、本遺跡の南方約27㎞にある雄勝城出土のヘラ切りの須恵器杯も、A値は0.47~0.56、平均で 0.534、B値は0.94~1.32、平均で1.154(註16)となっているので、払田棚だけというのは決定的で はない。本遺跡窯跡製作の須恵器杯が雄勝城及び払田棚跡の計測値の一部しか占めていないことは、 今までに検出されていない、ヘラ切りの杯を出土する新たな登窯の存在が予想される。

本遺跡の登窯が営まれていたと考えられる8世紀末から9世紀中頃は、陸奥・出羽両国の開拓が進むが、一方では蝦夷の頑強な反抗に出合う時期でもある。こうした混乱の中で、成沢では什器の生産が不断に行われていたのである。本遺跡から墨書のあるへラ切りの須恵器杯が採集されているところをみれば、生産に従事した工人集団もきちんとしたものであろう。このような生産活動が当地方の開拓を支えているのであり、やがて、貞観12年(870年)には山本郡の安隆寺が定額寺となる程に開発が進むのである。と同時に、本遺跡の生産を支援したと考えられる払田棚の建設時期についても、成沢遺跡出土の三基の登窯が間接的に示唆するところは大きい。

最後に、調査期間中、ご協力いただいた山口鉄雄氏、山口孫一郎氏、山口喜代松氏、能味龍太郎

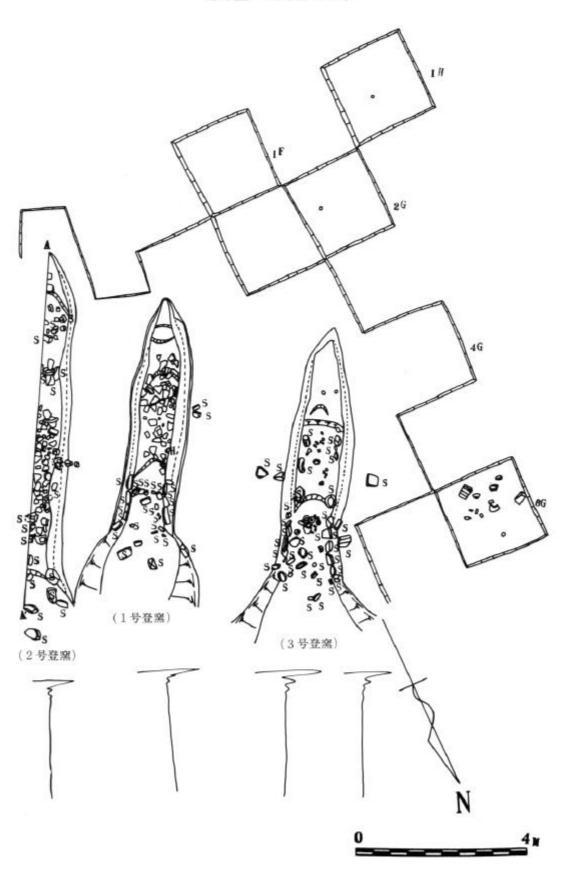
氏,加賀勘七氏,宿泊一切を引きうけていただいた大川西根公民館長伊藤養治郎氏,公民館主事小 山由雄氏に末筆ながら感謝の意を表して稿をとじたい。

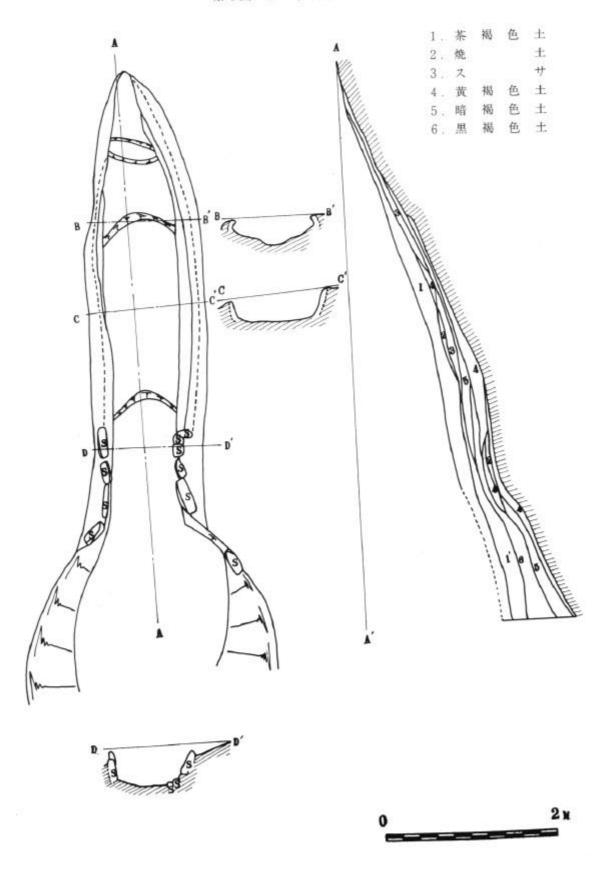
- 註1 昭和49年度「成沢遺跡発掘調査略報」 大曲市教育委員会
- 註2 武藤鉄城 「宝竜台」 1955
- 註 3 武藤鉄城 「袖野」 1952
- 註4 「中杉沢遺跡発掘調査概報」 横手市教育委員会 1973
- 註5 「黑森山麓繩文期竪穴群」 十和田町教育委員会 1971
- 註6 武藤鉄城 「秋田県仙北郡九十九沢窯跡」 日本考古学年報2 1949
- 註7 昭和50年7月に調査
- 註8 昭和49年度「手形山窯跡」 秋田考古学協会 1975
- 註 9 「海老沢窯跡緊急発掘調査報告書」 秋田県教育委員会 1950
- 註10 昭和49年8月に調査
- 注11 岡田茂弘,桑原滋郎 「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」 研究紀要 I 宮城県 多賀城跡調査研究所 1974

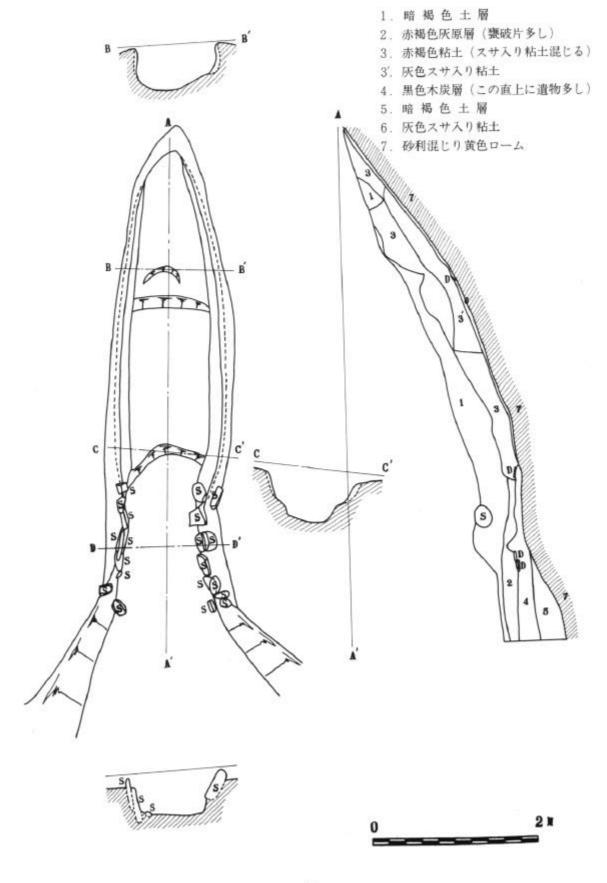
計12~計14 註8に同じ

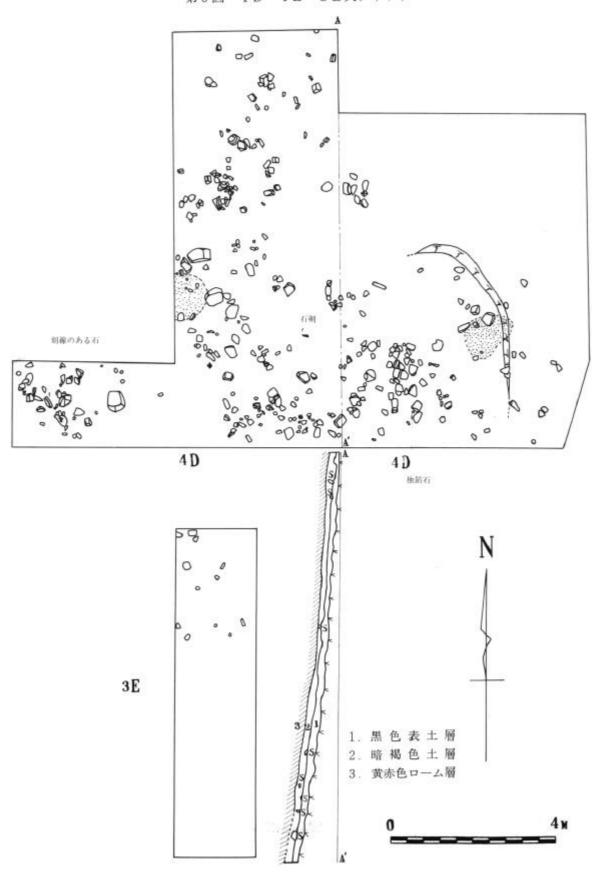
- 註15 「払田栅跡」 第7次発掘調查現地説明会資料 秋田県払田棚調査事務所 1975
- 註16 「足田遺跡第7次発掘調査略報」 羽後町教育委員会 1974から作成

第3図 4A大グリッド

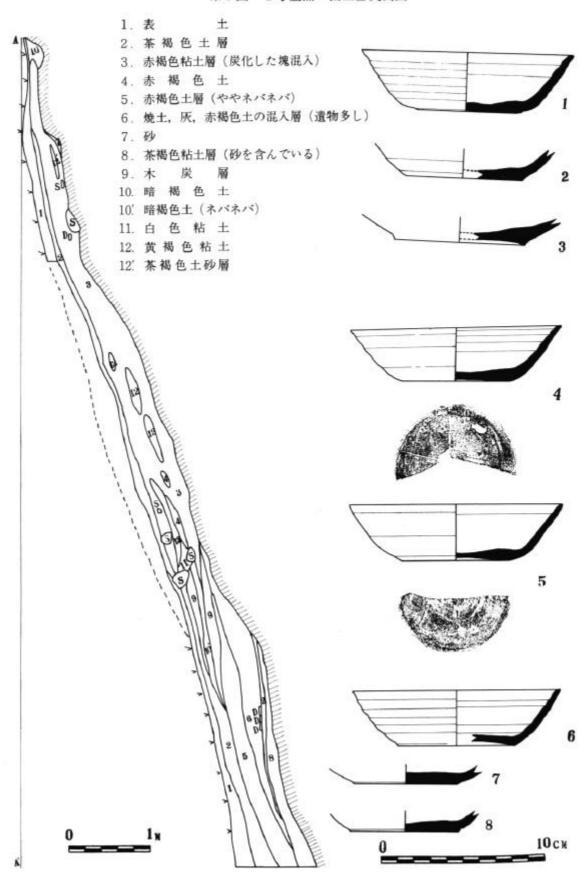




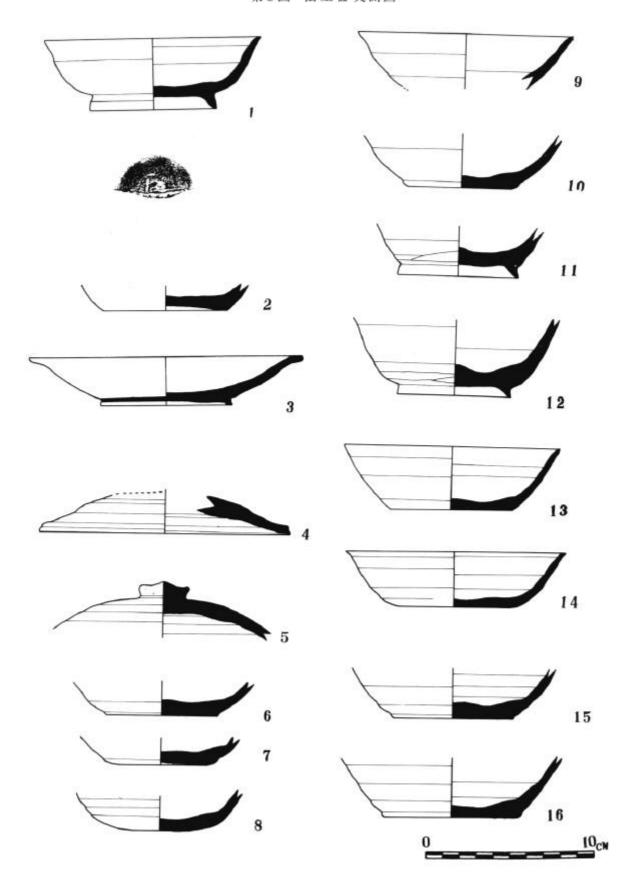


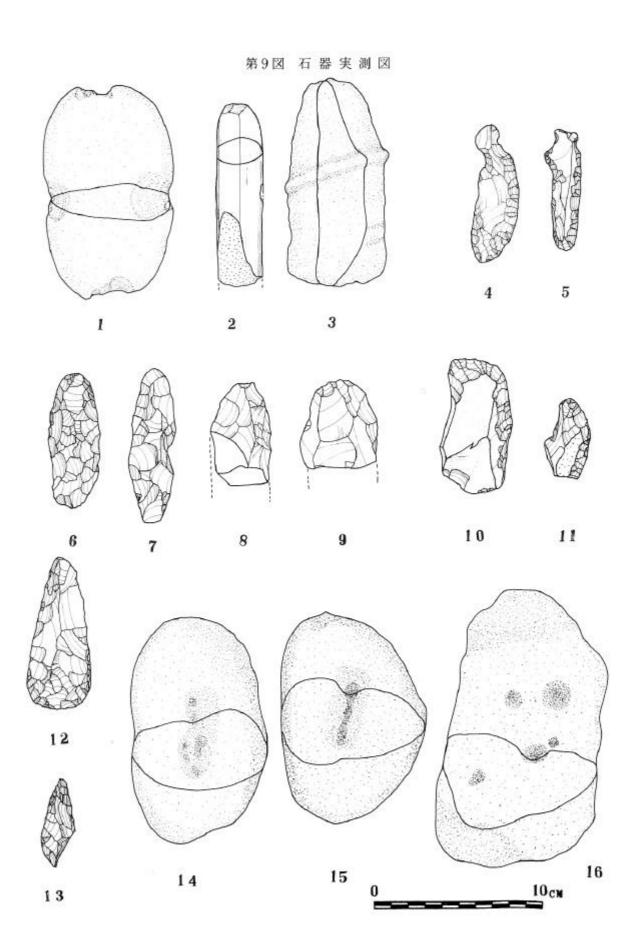


第7図 2号登窯・出土器実測図



第8図 出土器実測図



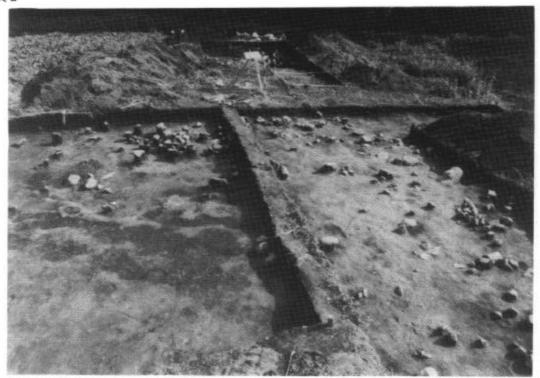




1. 西側からの遠景



2. 調 査 地 点



1. 4 E大グリッド中心の配石



2. 配 石 遺 構

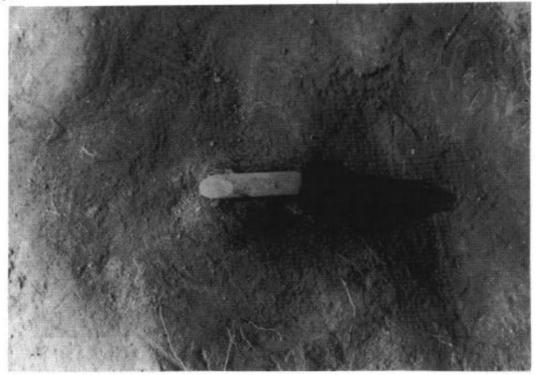


1. 配 石 遺 構



2. 配 石 遺 構

写真4



1. 石剣の出土状態



2. 独鈷石の出土状態



1. 登 窯 全 景



2. 1 号 登 窯



1. 1号登窯杯出土状態



2. 1 号 登 窯



1. 2 号 登 窯



2. 2号登窯出土状態



1. 3 号 登 窯





1 3号登窯出土状態



2. 3 号登窯

写真10 1号登窯燒成部出土遺物

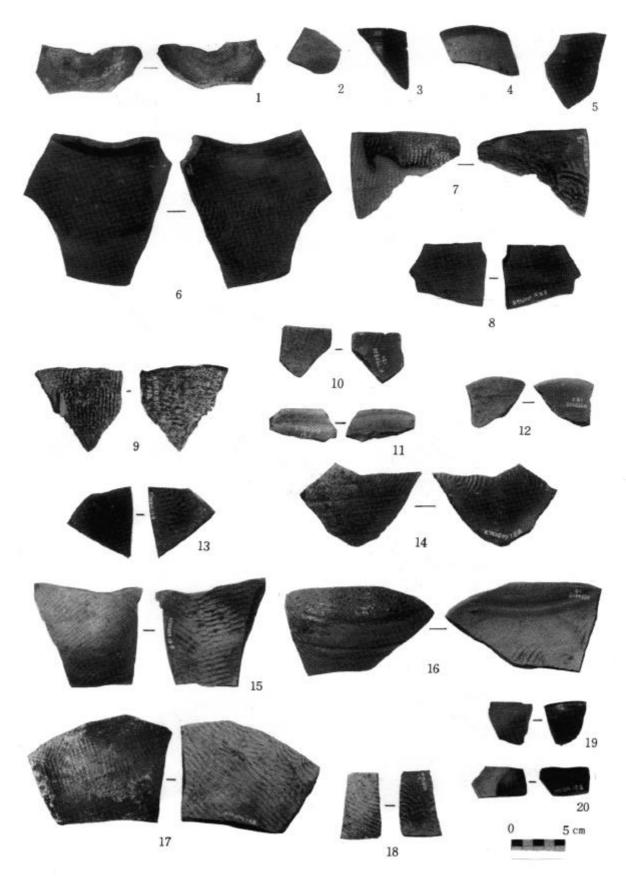
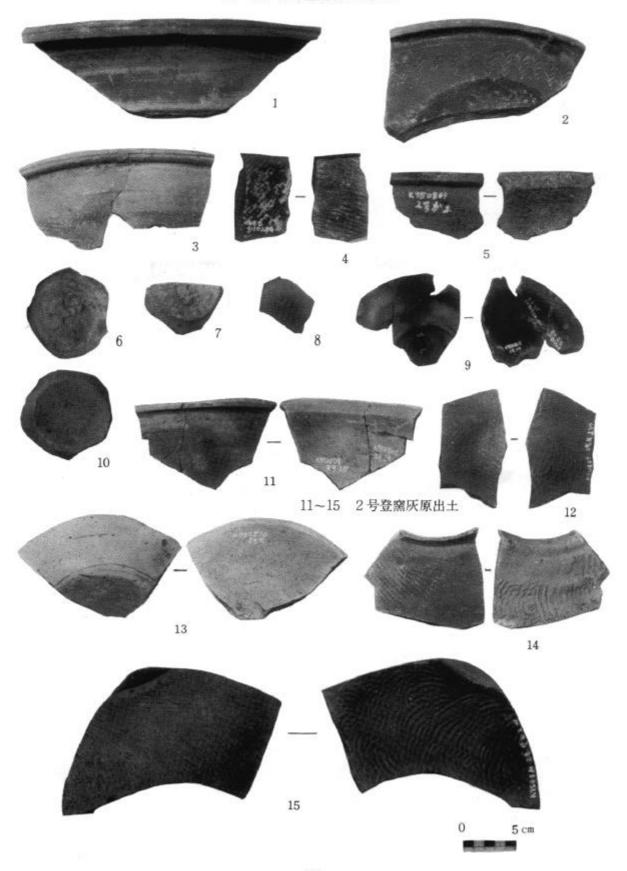
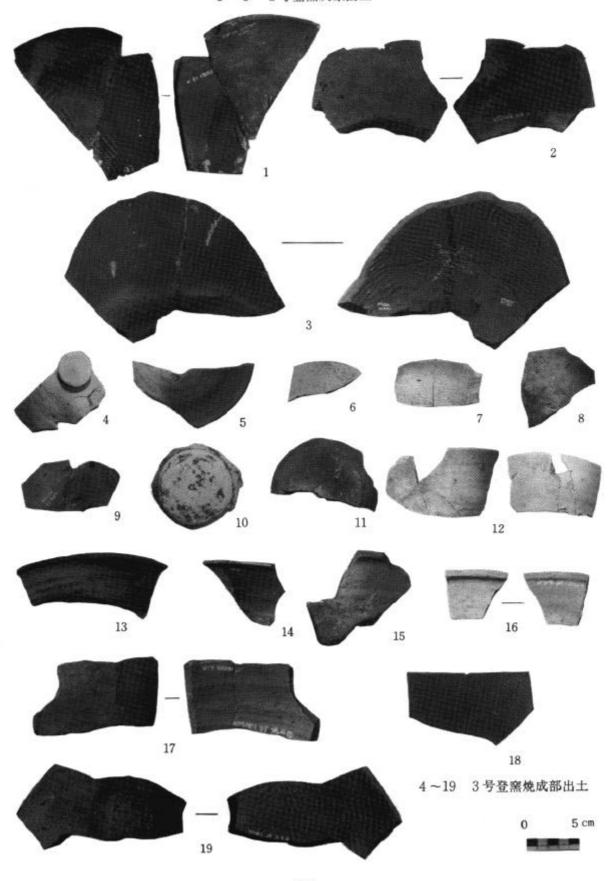


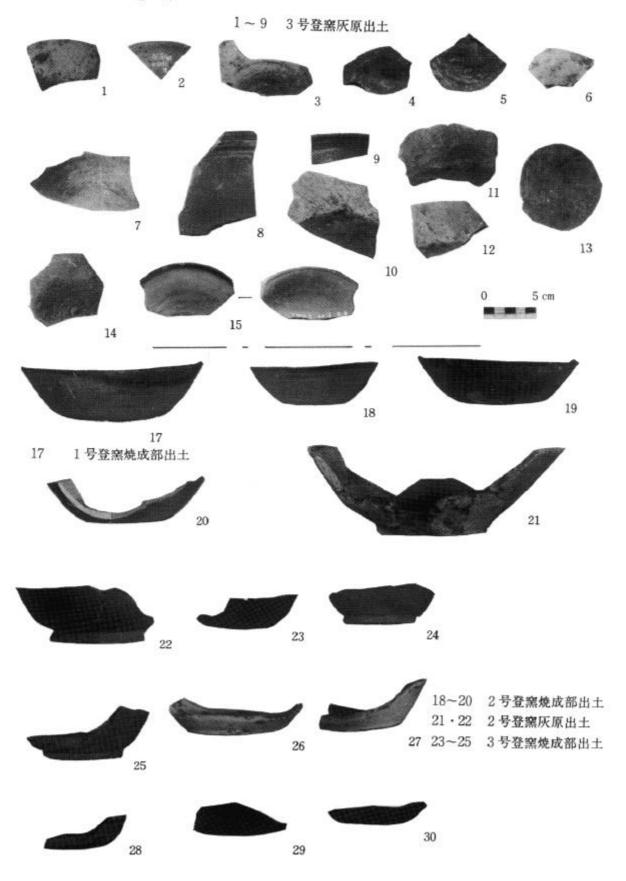
写真11 出土遺物

1~10 2号登窯焼成部出土



1~3 2号登窯灰原出土





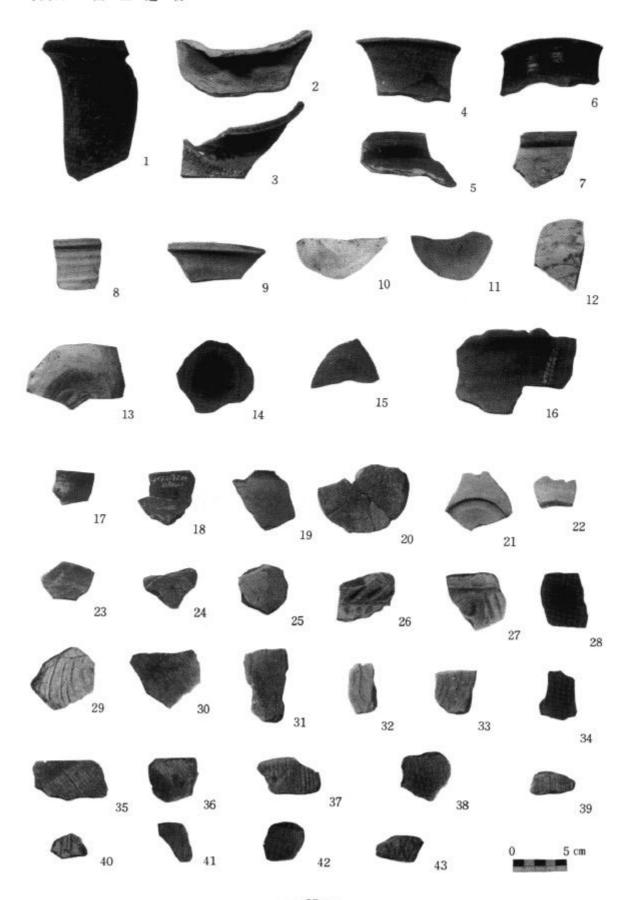


写真15 出土遺物

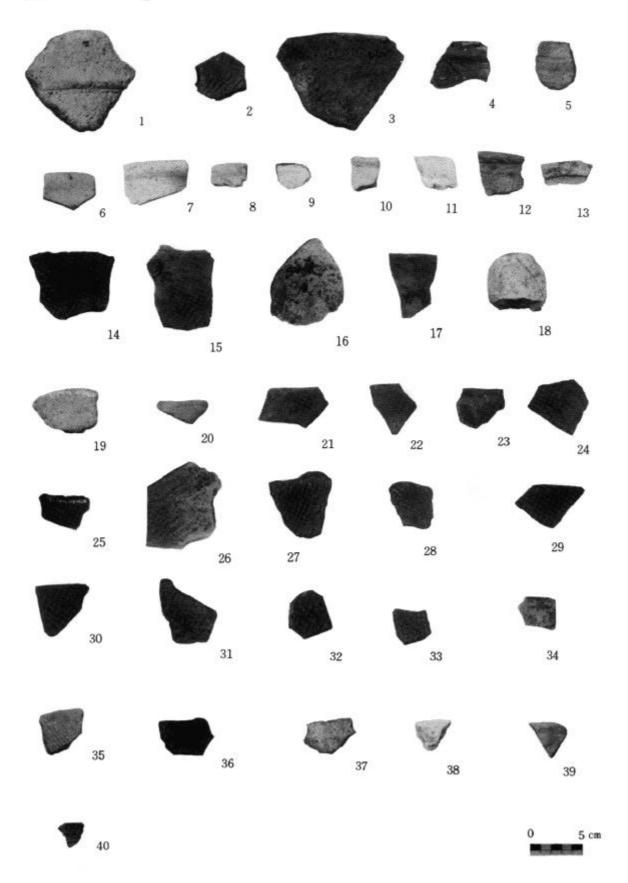


写真16 出土遺物

